5　遷都・造宮の推進

和気清麻呂公がふたたび本格的に活躍されるのは、桓武天皇朝の延暦年間に入ってからである。桓武天皇は、天応元年（七八一）即位のさい、すでに四十五歳であった。しかし、すこぶる健康に恵まれ、立太子以前に大学頭や中務卿などの要職を勤められた経験も活かして、長年つづいた仏教偏重の政治を克服し、律令国家を建て直すため、積極的な意欲をもって親政に励まれた。そのひとつが、遷都・造宮事業であり、それをもっともよく理解し推進した第一人者が清麻呂公にほかならない。

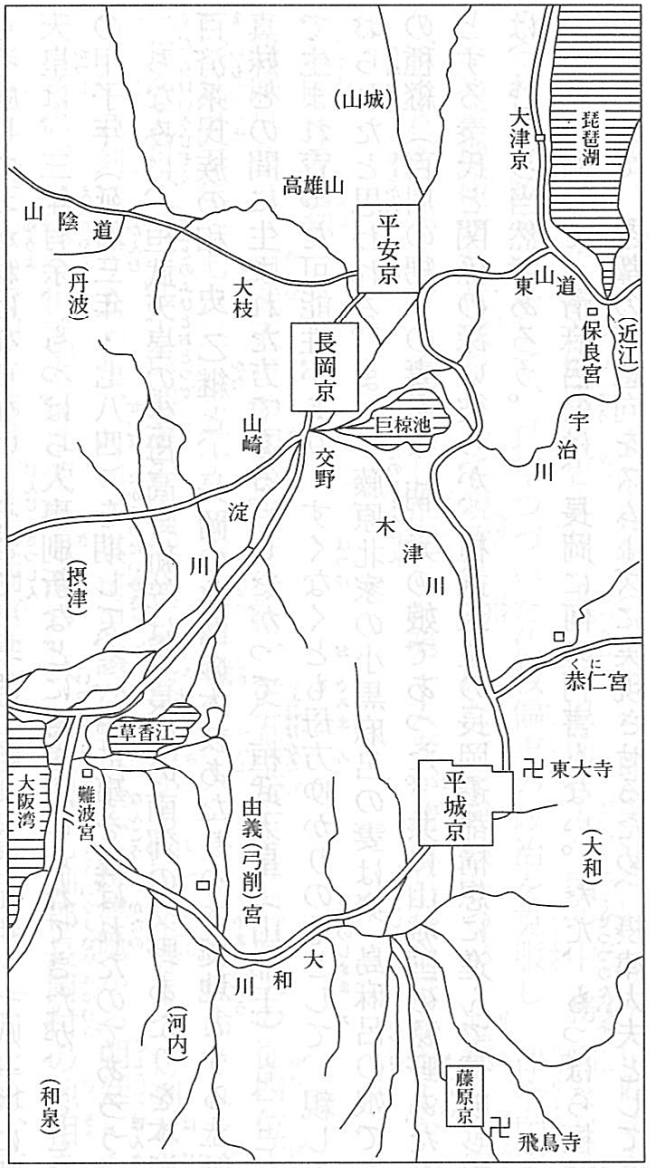
長岡への遷都

清麻呂公は、桓武天皇の即位半年後に、従五位下より三階上の従四位下に昇叙され、延暦二年（七八三）、五十一歳で摂津職の大夫（長官）に任命された。そして翌三年の五月、二万匹近い蝦蟇の大群が、難波の市から四天王寺まで行列して門内に入り、午の刻に散り去った、という不可思議な報告が、摂津職から朝廷にもたらされた。その三日後、桓武天皇は使いを遣わし、山城国乙訓郡長岡村の地相を調べさせておられる。ついで同年六月、造長岡宮使を任命し、早くも十一月には、正式に長岡宮へ遷御された。そして翌四年正月には、この新宮の大極殿において朝賀の儀がおこなわれている。

これだけみると、長岡への遷都は、いかにも慌しく進められたように思われよう。しかし、おそらくこの計画は、桓武天皇とその側近との間で、かなり早くから秘かに話し合われてきたにちがいない。ただ、その実行には莫大な費用と労力を要するだけでなく、七十数年栄えた平城の都に執着する人びとの反発や動揺が生ずることも考慮しておかねばならない。そこで、辛酉の年（天応元年・七八一）に即位された天皇は、三年有余、もっぱら人事刷新などに意を用いられてきたが、ここに諸事一新の甲子年（延暦三年・七八四）を期して、一挙に事を運ばれたのであろう。

ちなみに、桓武天皇の生母高野新笠は、長岡の南郊の交野あたりを本拠地とする百済系氏族の和史乙継と、長岡の北西の大枝あたりを本拠地とする土師氏出身の真妹との間に生まれた方である。したがって、桓武天皇（山部王）も、この長岡近辺で生まれ育った可能性があり、すくなくとも母方ゆかりの地として、親しみをもっておられたと思われる。また、藤原北家の小黒麻呂の妻は秦島麻呂の娘であり、式家の種継（百川の甥）の妻も秦朝元の娘であった。共に山城国の葛野あたりを本拠地とする秦氏と関係の深い彼らが、桓武天皇の長岡遷都構想に進んで賛成し協力したのは、むしろ当然であろう。

それに対して、清麻呂公は、長岡に何の利害もない。ただ、もっぱら桓武天皇の信任に応えて、遷都の御意向をスムーズに実現させるため、摂津大夫として為しうるこ



平城・長岡・平安京の位置関係略地図

とに取りくんでいる。そのひとつが延暦三年（七八四）の蝦蟇行列の報告であり、これは『水鏡』によれば、「遷都アルベキ相」を護王の武神である四天王も守護し給う吉兆として歓迎されたようである。また、摂津の住吉大社に、山背の賀茂・松尾・乙

訓などの神社と同じく、勲三等・従二位が奉られたのは、おそらく清麻呂公が住吉の大神に詣でて長岡遷都の加護を祈願されたからであろう。やがて、十一月十一日を卜しておこなわれた長岡宮への行幸啓には、清麻呂公が、皇后＝中宮を迎える役を勤め、翌十二月、造宮功労者として従四位上に叙されている。

この前後、長岡京の大規模な造営は、まさに日夜兼作の突貫工事で強行されていた。ところが、延暦四年（七八五）九月、中納言兼造宮使長官の藤原種継が反対派に射殺されるという不穏な事件が発生した。のみならず、それに関連して皇太子の座を追われた早良親王（三十六歳）が憤死され、まもなくその怨霊にたたられたような不幸な事件が相次いでいる。それでも、造宮の工事は何とか続行されており、摂津大夫の清麻呂公が、同七年（七八八）に「河内川を鑿り、直ちに西の海（大阪湾）に通じて、水害を除かんと擬す」る大改修工事に着手されたのも、淀川下流の水量を調節して、長岡京あたりの水害を防ごうとされたからであろう。

しかし、さらに数年たっても、造営工事は完成できそうにない。そのうえ延暦十一年（七九二）の六月と八月、集中的な大雨のために桂川が氾濫して、長岡京の左京一帯が水害に襲われ、このあたりの地理的な欠陥を露呈してしまった。

そこで、薨伝によると、「長岡新都、十載を経て未だ功成らず。費あげて計るべか

らず。清麻呂潜かに奏す。上（桓武天皇）遊猟に托して葛野の地を相せしめ、更に上都に遷りたまふ」とみえる。つまり、清麻呂公は、思い切って長岡京の造営を中止させ、新たに葛野方面へ再遷都すべきことを進言されたのである。

桓武天皇としては、長岡への遷都を強行し、その造京に十年もの歳月と労力・費用を傾注してこられた立場上、それを中止するに忍びなかったであろうし、それには反発も批判も出ること必至であったと思われる。しかし、このピンチに現実の諸状況を総合的に判断して「潜かに奏」された清麻呂公の提言をえて、天皇はただちに嘉納され、みずから新しい候補地（野）の検分に何度も出かけられたのである。

平安京の造営

このようにして、延暦十二年（七九三）早々、葛野郡の宇太村あたりがふたたび遷都するのにもっともふさわしい「四神相応の地」と判定された。そこで、秦氏とも関係の深い民部卿藤原小黒麻呂が造宮大夫（長官）となって工事が開始されると、桓武天皇は、その造営工事をしばしば巡覧督励しておられる。

そして早くも翌十三年（七九四）の十月二十二日、造営中の「新京」へ正式に遷御され、二十八日「葛野の大宮地は、山川も麗しく、四方の国の百姓の参り出で来ることも便にして」云々という「遷都の詔」を発せられた。また十一月八日の詔にも「此の国、山河襟帯、自然に城を作す。……子来の民、謳歌の輩、異口同辞、号して平安京といふ」とみえる。

ところで、清麻呂公は前述のごとく、当地への再遷都を桓武天皇に対して内々奏上された提唱者であるが、平安京の造営事業には、初めのうち表立って関与することを遠慮しておられたように見うけられる。

もっとも、『掌中歴』によれば、遷都のおこなわれた延暦十三年、造宮亮（次官）の民部大輔菅野真道とともに「判官」（造宮使三等官）の「式部大丞和気広世」らが、京中の大小路・築垣・堀溝・条坊などを定めた「造京式」を作成して奏上したという記事がみえる。したがって、あるいは、少なくとも長男の広世を通じて、新京の造営プランについて清麻呂公の意見を示されるようなことはあったかもしれない。

しかし、この大事業は遷都後、数年たってもなかなかはかどらなかった。皇居・大内裏の造営も容易でないが、それとともに北高南低の山城盆地を幾筋も流れる河川を改修しながら、平城京のような整然たる条坊都市を造成しなければならなかったのである。

すなわち、平安京の大内裏と朱雀大路は、船岡山から真南の中軸線上に設定された

が、その西側には紙屋川（荒見川）や野川（桂川）などが流れて湿地帯が多く、その東側にも賀茂川（鴨川）や高野川（埴川）などが流れていた。そこで、紙屋川の流路を改修して西堀川とし、賀茂川の一支流を東堀川とする。それとともに、その本流と高野川とが下鴨あたりで合流してから、ほぼ真南のほうへ流れる鴨川（東河）に、かつて秦氏が桂川（西河）に築いたような堤防を造る。さらに、条坊を区画して宅地を造成する等々の大土木工事がおこなわれたのである。

そして、このようなむずかしい大改修工事を担当されたとみられるのが、清麻呂公にほかならない。かつて摂津大夫として淀川下流の改修工事などを手がけた経験もかわれて、起用されたのであろう。薨伝に「民部卿兼造宮大夫・美作備前国造和気朝臣清麻呂薨ず」とみえるから、おそらく初代の造宮大夫藤原小黒麻呂が延暦十三年（七九四）に薨じたあと、二代目の造宮大夫（兼民部卿）を引きうけ、晩年まで勤めておられたことになる。

さらに、同十五年九月に葛野郡の「公田二町」を賜わり、また同十七年、辞任を願い出られたが優詔して聴されず、かえって子孫にまで伝えしめられる「功田二十町」を賜わっている。晩年にいたるまで公務に精励された清麻呂公を、桓武天皇がいかに深く信任し高く評価しておられたか、このような処遇からも知ることができよう。